京アニ あの時 何が

36人が亡くなった京都アニメーションの放火殺人事件から6カ月。過酷を極めた火災現場で何が生死を分けたのか。朝日新聞が入手した京都市消防局の活動記録や、救助に携わった市民や医師らへの取材から教訓を探った。▼1面参照

午前10時33分 最初の119番

「ドーンという爆発音がして煙が出ている」「けが人が大勢いる」

京都市消防局に119番通報が入ったのは午前10時33分。最初の出動指令が出るまでの2分間に22件の通報が寄せられた。京都市中心部の高所カメラの映像でも大量の黒煙が確認され、11隊が現場へ向かった。

「火事だ。やばい」

京都市伏見区の第1スタジオの西側で工事をしていた駐車場施工会社「SAT」（大阪）の大川武志さん(58)と、高橋龍児さん(39)は、同僚らと建物へ向かった。すすだらけの男性が、もくもくと黒煙をあげる建物3階の窓から脱出し、外壁にへばりつくようにして逃げていた。「足が半分かかるかどうか」（市消防局）の細い外壁の出っ張りだけが頼り。窓からは火の手も上がっていた。

大川さんらの作業用の3㍍の脚立では3階には届かない。思案していると、近くの住宅展示場の人たちが長いはしごを持ってきた。それでもまだ男性の足元には届かない。だが、大川さんは、建物の北西角に雨どいのようなものが上下に延びているのを見つけた。

「雨どいを使えば降りられる」。そう考え、男性を北西角に誘導した。高橋さんははしごの先端まで登り、男性に向かって叫んだ。

届かぬはしご「信じて降りてこい」

「足をつかんだるから、信じて降りてこい」

高橋さんは、はしごの方にぐんと伸ばしてきた男性の足を手のひらでつかみ、はしごまで誘導した。ペットボトルを渡し、「大丈夫か」と聞くと、男性は放心状態のまま、うなずいた。

「助けて！」。大川さんの同僚たちは、女性の叫び声がする建物1階へ走った。1階トイレ内に逃げ込んだ女性3人が外に出られないまま取り残されていた。出火から6分後、作業用のバールで窓の外側から格子を外し、その隙間から女性の体を折り曲げるようにして1人ずつ引っ張り出した。出火直後にトイレに逃げ込んでドアを閉めたことでトイレへの煙が遮断され、大川さんらの手助けもあって避難につながった。

「二次災害も怖かった。でも助けられる命がある以上は助けようと必死だった」。大川さんは、そう振り返る。事件後、作業車には上下に伸び縮みするはしご（スライダー）や救命に使えるロープなどを積むようにしているという。

噴き出す黒煙・炎 活動10分が限度

午前10時40分 消防が到着

最初に京都市消防局の指揮隊が到着したのは出火から9分後の10時40分。現場から約100㍍南の路上で、京都府警の警察官が青葉真司容疑者(41)を取り押さえたのとほぼ同時刻だった。隊員らは、路上にいる負傷者たちの状況と、すべての窓から噴き出す黒煙や炎を見てまず増援を要請。続いて到着した隊が43分に、放水を始めた。

避難した負傷者からの聞き取りで「建物内には約70人がいた」と把握。大勢の人が建物内に取り残されている可能性があった。炎と煙に包まれた状態で、空気ボンベを背負って隊員らが建物1階に入り、取り残された人の救助を始めたのは55分。1人を発見したがすでに息を引き取っていた。

続いて2階、3階、塔屋へと進んだ。猛烈な熱さから、屋内で活動できるのは10分間が限度。市内全域から出動した隊員約400人の多くが、交代で救出活動にあたった。1階で2人、2階で11人を発見したがいずれも全員亡くなっていた。救助隊が屋上に上がり、3階と屋上をつなぐ階段がある塔屋部分の扉を外側から開けられたのは、出火から3時間余りたった午後1時45分。扉の向こう側の階段では20人が亡くなっていた。（向井光真）

放心のテント「見たことない光景」

午前10時44分 トリアージ

「こっちにもけが人がいます」。近隣の住民から寄せられた負傷者の情報をもとに、現場に到着した消防隊は建物から避難した37人を捜した。負傷者は第1スタジオの周辺4カ所に分散して避難していた。現場から120㍍離れた公園で見つかった人もいた。ある消防局員は「熱くて怖い現場から遠くに、との思いで逃げたのだろう」と話す。

午前10時44分、救急隊が負傷者の手当ての優先順位を決めるトリアージを始めた。まずは、歩けるかや呼吸をしているかを大まかに判断。その後、重症は赤、中等症は黄、軽症は緑のタグをつけていく。赤は10人で、発生から約40分間で判定を終えた。午後1時40分までに黄の6人、緑の20人を合わせた男女計36人の判定を終え、計8病院に運んだ。

午前10時55分 応援の打診

「火災で多数のけが人が出ている」。市消防局から京都第二赤十字病院（京都市上京区）に応援の打診があったのは午前10時55分。7年目の宮国道太郎医師(35)は出動を覚悟した。

正式に市消防局から派遣要請があったのは同11時30分。宮国医師はすぐにドクターカーで現場に向かった。テント内で黄色のタグをつけた人が寝ていて、多くは言葉もなく、放心状態のように映った。宮国医師は「見たこともない光景。医療チームとして何もできず、無力感を感じた」。

「できるだけきれいな状態で遺族のもとに帰したい」との思いから、隊員たちは暗闇の中、4人1組で遺体を運び出した。建物横のテントには、2、3階で見つかった遺体が次々に運び込まれた。医師は一人ひとり、瞳孔や脈、呼吸を確認。遺体に手を合わせて死亡確認時刻を伝えると、隊員が死亡したことを示す黒のタグをつけていった。（大貫聡子）

シミュレーション・避難器具…教訓は

今後に生かすべき教訓は何か。

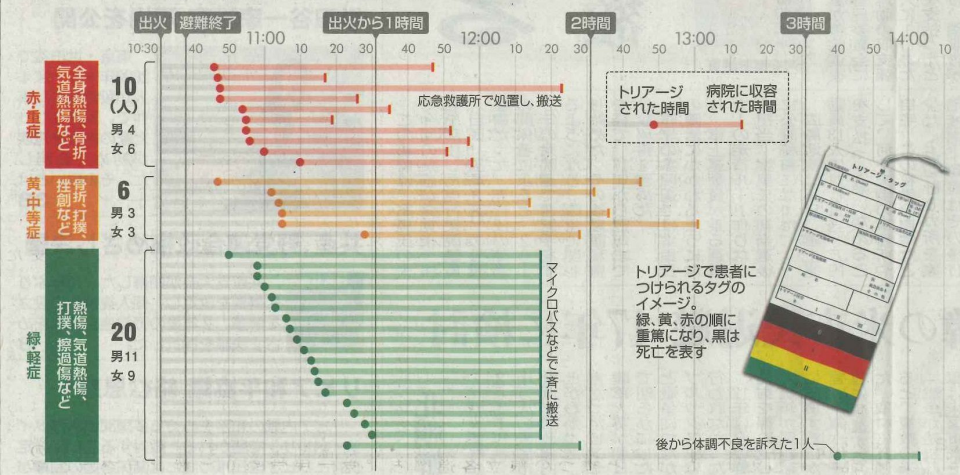
東京女子大の広瀬弘忠名誉教授（災害心理学）は瞬時の避難行動が生死を分けたとみる。特に2、3階の人たちは突然、熱風や煙に襲われて何が起きたかわからず、頭が真っ白になって身動きが取れない「凍りつき症候群」に陥った可能性があると指摘する。「普段から頭の中で異常事態をシミュレーション、非常口の場所や避難経路を確認しておくことが重要だ」と話す。

消防法施行令では、収容人員や階段の数などに応じて避難はしごなどの設置を求める。ただ、階段が複数あった第1スタジオには設置義務はなかった。建物から避難した37人のうち25人は2階のベランダや窓から飛び降り、3人は建物外にかけてもらったはしごを下って助かった。広瀬教授は「消防法で義務付けられた対策だけでなく、避難はしごや外階段の設置などが必要だ」と話す。

京都市消防局も、年度内に策定する放火やテロなど想定外の大規模火災に備えた避難指針で、避難用のはしごなどを屋外に設置するよう幅広く促す方針だ。

今回、市消防局は医療機関とも連携し、重症者を現場に近い病院に分散して搬送し、治療を優先させた。現場に出動した京都第二赤十字病院の救急科の石井亘副部長(49)はさらに大規模な火災や災害となれば、自治体の枠を超えた連携が必要になると感じた。「素早く搬送し、スムーズになるには、トリアージ結果や受け入れ可能な搬送先などの情報を、消防や全病院間で瞬時に共有できるシステムを導入すべきではないか」と指摘した。（川村貫大）

京アニ放火事件の主な消火・救急活動（2019年7月18日）

京都市消防局の資料から

トリアージと負傷者36人の搬送状況